

## イタリアの図書館

今村元市

はじめに — ヴァチカン図書館  
— アッシジ—シエナ—フィレンツェ国立中央図書館 — メディチ・ラウ  
レンチアナ図書館 — ボローニャ—サン・マルチアナ図書館 — アンブロ  
ジアーナ図書館

### はじめに

今年（1984）の7月中旬から8月上旬にかけて、イタリアを中心として、3回目のヨーロッパ旅行をした。イタリアは、1980年、ローマ以南を経験していたが、今回は、ローマ以北に限った。

簡単にイタリアの図書館事情にふれてみよう。「ブリタニカ国際大百科 14巻 1974版」に次のように述べてある。

イタリアの図書館組織は34の州図書館（註）を基盤としており、それらの図書館は統一された計画のもとに管理されている。すなわち文部省の15の地方支庁が図書館経営を監督し、多数多様の図書館の調整と協力を推進している。またこれまで図書館のなかった地方の小都市にも公共閲覧施設を開設した。34の州図書館は、1907年の法規に従って管理されている。そこには、ローマとフィレンツェの二つの国立中央図書館、バリ、ミラノ、ナポリ、パレルモ、トリノ、ベネツィアの国立図書館、クレモナ、ゴリツィア、ルッカの州図書館、ボローニャをはじめ12の大学図書館などが含まれている。フィレンツェの国立中央図書館では『イタリア全国書誌』を、ローマの国立中央図書館では『国立図書館新収現代著作目録』を刊行している。いくつかの図書館の総合目録と、インキュナブラの目録の作製も進められている。

（註）以上は、「BRITANICA」（1968年版）の抄訳であるが、州図書館というのは誤訳ではないかと思われる。原文を引用する。The Italian

library system is based on the 34 governmental public libraries,..... これをみると、州図書館という意味と違うようである。ここは、官公立と訳した方が妥当である。ついでながらイタリア語では、州を regione という。1984年現在、イタリアの州は20を数える。

総体的に、イタリアの図書館は、閉鎖的であるといえよう。分類などは、自館独自のものが多く、簡単に図書を探すことができなかつた。日本の国会図書館でも、いささかその嫌いはあるが、後述のフィレンツェの国立中央図書館は、国際十進分類を採用していた。

スペイン（1982年訪問）の場合は、国立、大学すべて国際十進分類法で統一されていたので理解し易かつた。ParisのCentre Georges Pompidou内のBibliotheque dinformation（通称BPI）は、世界最高の公開図書館であるが、やはり国際十進分類法を採用しているので見学が容易であつた。

**ヴァチカン図書館**（ローマ）Biblioteca Apostolica Vaticana ヴァチカン使徒図書館と云うのが正式である。歴史は古く、その起源は、中世の教皇の文庫に発するとみられる。4世紀ごろ、教皇ダマススがローマ宗教文書館を創設したのが古い記録である。

教皇のアヴィニョン捕囚時代（1309～1376）は、中世教皇図書館の黄金時代といわれるが、そのほとんどが散逸してしまい、その一部は、パリの国立図書館に入っているといわれる。現在の図書館は、15世紀、ローマで創立されたものに由来し、その後、今日に至るまで収書に努力した結果、現在、手書本（マニクリプト）約3500、記録文書約130,000図版類約130,000、インクナブラ約7000、他の書籍約900,000という一大コレクションと成長している。その内容は、古典文学、歴史、文献学、哲学、神学、古文学の領域にまで及んでいて、世界中の学者に恩恵を与えている。図書館への入館手続きは、事前に準備を要する。例えば、パスポート、写真、紹介状などである。そこで、一般には、システィナ大広間、ここは、図書館の貴重本陳列室になっているので、ここを見学するのが、一番近道で、手取り早い。ヴァチカンを見学する人の殆んど全ては、サン・ピエトロ大聖堂に参拝する。その隣接する建物が、システィナ大聖堂である。入堂するためには、サン・ピエトロの正面から外に出て、ヴァチカン市国の外壁に沿って、美術館の入口まで

歩かねばならない。これがかなりの距離がある。15分位はかかるのである。現在は、サン・ピエトロの横から、観光バスが出ているので、これに乗っても良いが、時間的に制約を受けるので、余裕のない旅行者は、歩行の方が確実であろう。美術館の正面から入り、長い螺旋回廊を上り、彫刻の間、地図の間などを通り抜けて、システィナ礼拝堂にたどりつく。

有名なミケランゼロの大天井画「最後の審判」がある場所である。ここでは左右の壁に、左に旧約聖書の世界、右に新約聖書の世界が描かれている。ポッティチェリの作品が左右の壁にあるが、正面と天井のミケランゼロに圧倒されて注目する人がいないのは惜しいことであると思う。礼拝堂を出て、階段を上ると、システィナ大広間で、ここが貴重図書の展示室になっている。廊下のように長い大広間である。陳列ケースが数多く並べられてあったが、空のケースが多かった。ローマ教皇の世界巡歴の旅に従って貸出されているということであった。説明板のみが残されていたので、それを若干あげると、

ギリシャ語聖書写本 4世紀

キケロ「デ・リブブリカ」写本 4世紀

ウイルギリウス写本 4世紀等

ダンテ「神曲」ポッティチェリ挿画、これはケース内にあった。その他に見ることができたものに、ミケランゼロ詩稿、ルターの書翰などがあつた。

ヴァチカン展示室の図書については、天理大学の元、図書館長富永牧太氏の紹介（「学燈」昭和27年10月号）が、もっとも詳しいということであるが、筆者未見である。ヴァチカン図書館は、聖書コレクションでも知られるが、所蔵の中で、もっとも古いのは、聖ペテロの第二の手紙（マニュスクリプト）、ギリシア語聖書で3世紀のものである。聖書コレクションに関しては、1972年UNESCO国際図書年を記念して、聖書目録が出版されている「IL LIBRO DELLA BIBIA」（イタリア語版）である。これは館内の図書展示室前の売店で販売されている。また、この目録の一部が、カラーライド化され（60枚）ていて、これも販売されているのは至便である。こちらは英語版もある。

日本関係の史料が、ヴァチカン図書館内に多く所蔵されているには知られるところであるが、これは次の三か所に保存されている。

- (1) ヴァチカン枢密文書館 (Archivio Segreto Vaticana)
- (2) ヴァチカン使徒図書館 (Biblioteca Apostolica Vaticana)

(3) 布教聖省 (Congregatio de Propaganda Fide)

史料の大部分は、一部(註)を除いてマイクロフィルム化されて、東京大学史料編纂所に保存されている。

(註) ヴァチカン枢密文書所蔵史料の中で、教皇の小勅書(Brevi de Papa) 1583~1640(天正13年一寛永17年)の中に、鎖国以前の日本に関する記事があるが、複製禁止になっている。詳細は、HISTORICAL DOCUMENTS RELATING TO JAPAN IN FOREIGN COUNTRIES VOL XII 1962年東京大学史料編纂所発行を参照されたい。

ヴァチカン図書館については、これから研究しなければならないことが多い。一応これまでにしておく。

**アッシジ (Assisi)**

「聖フランシスコの小さな花」で有名な、アッシジの街、教会の街である。スバッシオ山の中腹に扇状に展開した街。13世紀に、フランシスコ派を創設した聖フランチェスコと彼を慕って入信した聖女キアラの遺跡である。サン・フランチェスコ大寺院まで相当な登り坂であって、更に長い登り坂が続く、途中にミネルヴァ神殿があり、その手前に、いかめしい鉄扉の図書館があった。普通のガイドブックには記載がないので、是非入館をと望んだが9月10日まで夏期休暇のことで断念した。案内所で聞くと、ほとんどがキリスト教関係の図書で占められていて、インキュナブラもあるとのことであった。

**シエナ (SIENA)**

トスカーナ地方の中心地、中世イタリア都市国家の一つ、中世の雰囲気がどことなく漂う街である。市街の中心は、カンポ広場であり、この広場の一角にプブリコ宮殿があり、そのすぐ近くにピッコロミーニ宮殿があり、シエナ市の古文庫になっている。壁際には、天井近くまで、古文書が並べられているが、その内容は不明である。多分インキュナブラもあると思われる。勝手に室内に入ったが、係の人も不在である。陳列ケースの中は、楽譜のコレクションである。新聞紙以上もある大型のグレゴリオ聖歌楽譜であった。

**フィレンツェ国立中央図書館 (BIBLIOTECA  
NAZIONALE CENTRALE FIRENZE)**

サン・ジミニール。ピサ(斜塔で有名)ルッカ。ピストイヤの各都市を素通りして、フィレンツェに入る。ここで驚いたのが、ローマに籍のある車は、入市料というものを取られるということであった。

イタリアでは、ローマとフィレンツェに、それぞれ国立中央図書館が設けられている。

図書館の建物は、アルノ河に面したルネッサンス風の近代建築である。1920年の建造といわれる。1966年アルノ河の大氾濫で、建物に損害を来したものと見え、正面玄関は、閉鎖したままで、側面の入口から、暗い階段を上って閲覧室に行く。途中の廊下に受付があって女性の係員が、入館票をくれる。記名して帰りがけに渡さねばならない。荷物は、ノート、筆記用具を除いては、ロッカーに入れなければならない。ロッカー室入口の男性係員が、親切に案内してくれる。レファレンサーが英語が判るというので、参考室に行く。このレファレンサー、40才位の男性であるが、英語とイタリア語を交ぜながらジェスチャーたっぷりて解説の労をとってくれる。彼の話の要点は、以下のとおりである。

この図書館は、1866年以降、版權登録のための納本図書館としての特権を有している。

イタリア全国書誌は、ここで編集している。

ローマの国立中央図書館も納本図書館であるが、1870年以降である。フィレンツェは、1747年開館、国立になったのは、1862年であるから、古い歴史を有する。など……

館内は、学生と覚しき人達で満員の状態であった。陳列ケースが、廊下や部屋の隅に置かれてあったが、この中に、ボッカチオ。マキアヴェルリ。ガリレオ。チェルリーニなどの自筆稿本。ダンテ「神曲」の古版本などがあった。蔵書は約4百万、写本が2万3千、インキュナブラが3千6百点といわれる。

イタリアでも最大の図書館といえよう。展示目録が21冊刊行されている。第1冊は番号なしで2冊目を1として現在No.20までが刊行されている。ほとんど絶版(esaurito)になっているが、No.20のSETTECENTISTI INGLESI PER ILLUSTRARE LA BIBLIOTECA PALATINAは申し出れば無料にて頒け

てもらえる。内容は1984年4月2日から9月29日までの展示目録である。

### メディチ・ラウレンチアナ (Biblioteca Medicea Laurenziana)

フィレンツェにおける国立以外の図書館で注目すべきは、メディチ・ラウレンチアナ図書館である。ここは、ヨーロッパで最初の公共図書館といわれる。メディチ家は、フィレンツェの名家、フィレンツェ共和国やトスカナ共和国の支配者でもあった。特にコシモ (Cosimo 1389-1464) は、イタリアきってのコレクターで、メディチ家図書館の建設を計画していた。孫のロレンツォ・ド・メディチ (Lorenzo de' Medici) がその志を継ぎ、その収集は、現在のラウレンチアナ図書館に納められた。図書館は、ミケランゼロが設計したということである。メディチ家礼拝堂には、ミケランゼロの彫刻「朝夕昼夜」の名作がある。礼拝堂の隣の道院の二階が図書館である。この二階へ上る階段もミケランゼロの設計という。残念ながら図書館は休館中で、中へ入ることも許されなかった。現在1万冊近くの古写本があるといわれ、質的には、世界最高級の定評がある。

### ボローニア (Bologna)

フィレンツェから北へ、アペニン山脈を越えて、ボローニヤへ向う。フィレンツェから車で約3時間の行程。旧・ボローニヤ大学のあった、アルキンナージオ宮 (Palazzo Archiginnasio) を見学する。16世紀の建物で1803年まで大学があった場所、大学は11世紀後半ごろ創設され、ヨーロッパでも屈指の古い大学。この大学の解剖教室で世界最初の人体解剖が実施されたといわれる。1638~1649年ごろのことである。教室は当時のまま保存されている。教室には手書の解説書が置いてあった。英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、それに日本語まであったのには、驚ろかされた。ここの名物は、2階の廊下、各部屋に、教授や学生の紋章が、所狭きまで飾られていることである。また2階には、教授研究室があって、古典文学、医学、法律などの本が山積していた。閲覧禁止ではあったが見学だけは許された。建物の他の部分は、市立図書館になっていて、多くの閲覧者の姿が見られたが、時間の関係上素通りした。

ボローニヤからラヴェンナ (RAVENNA) のダンテの墓に詣り、ついでフェラーラ (FERRARA) に着く。この地は、法王アレクサンドロ6世 (Pope

Alexander VI 1431~1503) に対して非難攻撃を加え、イタリアにおける宗教改革の先駆者として、プロテスタント派からも賞されている修道士サヴォナローラ (Savonarola 1452~1498) の出生地である。城門の前に、彼の銅像がある。

塩野七生著「神の代理人」に戦いぶりの詳細が述べられている。

パードヴァ (PADOVA) スクロヴェーニ礼拝堂 (Cappella degli Scrovegni) のジョットのフレスコ壁画「キリスト一代記」見逃せない立派なものである。

### サン・マルチアナ図書館 (Biblioteca Nazionale Marciana)

ヴェネツィア (VENEZIA) の中心サン・マルコ広場 (Piazza di San Marco) のドウカーレ宮 (Palazzo Ducale) のすぐ前に位置している。大きな建物であるが、周囲の回廊に、椅子、テーブルが持ち出されて、カフェ・テリヤの様になっているので、入口が判り難い。入口の上部に、半円形に、Biblioteca Nazionale Marciana) とあり、その下に LIBRERIA VECCHIA と刻してある。日本で発行されているガイド・ブックのほとんどは、この下の字のみを訳して、旧図書館としているが、これでは、ここは、元、図書館であるというような印象を受ける。強いて云えば、古文書館と訳すべきである。あるいは、現在のように国立マルチアナ図書館とすべきであろう。建物は、1500年ヴェネツィア建築の傑作といわれている。1468年枢機卿ベツサリオン (Cardinal Bessarion) より寄贈された古文書、マニュスクリプトなどを収容するため、サン・ソヴィーノ (1486~1570) に依頼して建てはじめられたという。尚、ベツサリオンの寄贈は、1464年という説もある。(E・Dジョンソン著：西欧の図書館史) 展示室の天井および壁には、ヴェロネーゼ、ティツィアーノ、テイントレットなどによる壁画が飾られている。現在、刊本約50万冊、写本1万2千点、他に中世初期写本などが若干蔵されている。展示室に陳列されているものの中でも主要なものは、

「説教集」クリソストモス 10世紀写本

「説教集・書翰集」同 11世紀写本。以上は、ベツサリオン蔵書、インキュナブラには次のようなものがあった。

ダンテ「神曲」4種 プレツァ1487年版 ヴェネツィア 1491, 1493, 1497年版。

イソップ 2種 プレッシア1487年版 ヴェネツィア 1493年版。

ボニファチウス8世教書 マインツ版 1465年刊。

などである。これらのインキュナブラは、挿画、周縁の装飾など、いづれも手彩で、豪華という他はない美本であったが、手に取ることは許されなかった。尚、この展示室に入るには、パスポートが必要であった。記名は室を出る際、求められた。階下は、国立図書館として利用されていて、そのほとんどが学生のものであった。この図書館には、利用案内が用意されていなかった。サン・マルコ広場の売店には、坂本鉄男著「ヴェネツィア」を売っていたが、附録に地図が付いていて便利である。

余談になるが、ヨーロッパの書籍には、I S B N (International Standard Book Number) が普及していて、ガイドブックの様なものにも附せられている。例えば、前記の「ヴェネツィア」は、I S B N 88-7666-048-8 という番号である。最初の88は国別番号で、これはイタリアを指す。日本は4で表わす。日本の場合、新潮社あたりは、かなり早くから利用していたが、岩波書店は、ようやく今年、1984年から使用を開始した。まだまだ普及速度は遅れているのである。

このI S B Nが広範囲に附せられるようになれば、各国における全国書誌の作成もより完全になるだろうし、世界書誌の作成も容易になってくことと考えられる。しかし、個人的出版のような部数の少ないものには困難なことであろう。

サン・マルチアナ図書館では、中世の彩色写本用に使用された各種のインクを見ることが出来たのは思いがけないことであった。更に附記したいのは、岩倉具視一行のいわゆる岩倉使節団が、明治6年(1873)5月27日にこの図書館を訪問していることである。ここで一行は、支倉六右エ門(常長)の書翰を見出している。詳細は、岩波文庫の「米欧回覧実記」(4)によられたい。マルチアナは、「マルチーフ」となっている。

### アンプロジアーナ図書館 (Biblioteca Ambrosiana)

ミラノ (Milano) には、有名な市立図書館 (Biblioteca Comunale di Milano) がある。ドウオモ広場のすぐ近くにあるので訪ねて行ったが休館中であった。

イタリアの図書館は、原則として、8月中は、ほとんどが休館中であり、



これが普通ということであった。筆者の認識不足であったが、当方も8月しか余裕がないので止むを得なかった。ブレラ絵画館 (Palazzo e Pinacoteca di Brera) に、国立図書が併設されていると聞いたが、ここも休館中であるとのことで断念。最後に、トリノ通りのアンブロジアーナ図書館に行く。入口が開いているので入ると、見学は差し支えないということで図書館に入る。写真撮影も自由であった。

一室の四方の壁、すべてが書籍である。建物は1943年の爆撃により全壊したが、その後再建されたもの。創立は1607年枢機卿フェデリコ・ボロメオ (Cordinal Federico Borromeo) によるという。

質量ともに世界有数の図書館で、蔵書数は、75万冊、パーチメントは1万2千点、最古のものは819年である。インクナブラは2073点の大コレクションである。特にマニュスクリプトの主要なものは、絵はがきとして売られていたので、その内容を知ることができる。館内で A History of the Ambrosiana という本を売っているので詳細を知り得る。2階は美術館になっている。ここではレオナルド・ダ・ビンチの「アトランティコ手稿」が展示されている。1750のスケッチから成るものである。他に、ボッチィチェリ、ブリューゲル、ティツィアーノなどがあった。

以上、かけ足であるが、今回の旅で訪ねたイタリアの図書館について述べたものであるが、研究不足で書き足りないことが多いことを記しておきたい。イタリアの図書館の近代化は、これからであると思う。一例として、国際十進分類法の採用が、フィレンツェの国立中央図書館でも、1960年以降であることからでも知られよう。

参考文献

- Allen Kent: Encyclopedia of Library and Information Science New York (1968~1983)
- Angelo Paredi: A History of the Ambrosiana London 1983
- Settecentisti Ingresi per illustrare Le Biblioteca Palatina Firenze 1984
- Michelin Italia Paris 1984
- ブリタニカ国際大百科 東京 1974
- 塩野七生 神の代理人 東京 1972
- E・Dジョンソン著 小野博訳 西欧の図書館史 東京 1974
- 岡田温 図書館—その本質歴史思潮— 東京 1980
- 芸亭 12・13号 天理大学図書館研究室